

## &lt;原 著&gt;

## 保育所（園）における「気になる子」に対する支援の研究

— 個別の（教育）支援計画を中心としたハンドブック作成の試み —

若松 昭彦\*・田坂 泰子\*\*

保育現場において、特別な配慮を要する子どもに対する保育や支援が課題となっている（原口・野呂・神山, 2013）。また、「個別の（教育）支援計画」の方が「個別の指導計画」よりも作成率が低いという現状にあることが、先行研究より明らかになっている。そこで、保育所（園）に対して、「個別の（教育）支援計画」に関する質問紙や聞き取り調査を行い、保育現場の実態や特色を的確に把握すると共に、保育現場の課題解決に向けたハンドブックを作成し、有用性の検証を行うことを本研究の目的とした。個別の（教育）支援計画を中心として作成したハンドブックは、具体的で理解しやすく役に立つ、若い保育士や学生には参考になるという肯定的評価が一定数あった。しかしながら、一人一人の子どもに合った支援法を生み出していかねばならないという指摘もなされた。聞き取り調査やハンドブック作成にあたって、保育士は、多様な子ども一人一人に対しての働きかけを常に考えているということが明らかになった。

キーワード：保育所（園） 個別の支援計画 ハンドブック

## I. 問題の所在及び研究の目的

## 1. 問題の所在

近年、保育現場において、障害のある子どもや、診断名はないが「気になる子」などの、保育を行う上で特別な配慮を要する子どもに対する保育や支援が課題となっている（原口・野呂・神山, 2013）。郷間・圓尾・宮地（2008）や河野（2010）の調査によると、「気になる子」は、「障害児」よりも多く存在し、保育における指導上の問題があるとする保育士が多いことが示されている。現在、このような「気になる子」を含めた特別な配慮を要する子どもが豊かな社会生活を送ることができるよう、保育所（園）においても「個別の（教育）支援計画」を策定し、本人を取り巻く関係者・機関が長期的な視点で一丸となって適切な支援をすることが求められている（厚生労働省, 2008b）。しかし、保育所保育指針やその解説書（厚生労働省, 2008a）では、「個別の計画」と記述はされているが、その詳しい内容や様式については明確に示されていない。また、「個別の（教育）支援計画」の方が「個別の指導計画」よりも作成率が低いという現状にあることが、既に多くの先行研究でも示されており、保育所（園）の「個別の（教育）支援計画」に関する理解が

十分でない可能性が大きいことも述べられている（中島, 2011）。保育実践の場で働く保育士が日々の保育で活用できる方法を検討することが早急に求められると考えられる（石橋, 2009）。

## 2. 研究の目的

本研究では、「個別の（教育）支援計画」策定を中心とした「気になる子」への支援の在り方について、保育所（園）に質問紙や聞き取り調査を行いながら、現場の実態に応じて、課題解決の方向性を示し具体的な支援方法を盛り込んだハンドブックを試作し、今後の保育現場での活用を目指して有用性の検討を行うことを目的とする。

## II. 方法

## 1. 質問紙調査

## (1) 対象

X 県内の計366所（園）の公立保育所（園）と私立（認可）保育所（園）

## (2) 手続き

筆者が行った質問紙調査の結果より、個別の教育支援計画の内容要素を含む保育所（園）の自由記述を分析した。手順は以下の通りである。①質問紙調査の個別の（教育）支援計画の内容の部分について記述内容を整理し、カテゴリーに分類する。②分類したカテゴ

\* 広島大学大学院教育学研究科特別支援教育学講座

\*\* 北九州市立門司総合特別支援学校

リーの項目の信頼性を検討するため、現場の保育園の園長と協議する。③カテゴリーの項目・分類内容の修正を行う。④カテゴリーに分類した内容について、学生2名の協力のもと一致率を算出し、一致しなかったものについては、再度分類の検討を行う。⑤カテゴリー項目と分類内容について、保育園園長1名と協議を行い、より信頼性の高いものにする。

## 2. 保育所（園）への聞き取り調査

### (1) 対象

調査協力が得られた20所（園）（公立：8、私立：12、私立のうち3所は認定こども園）

### (2) 時期

本調査は20YY年11月中旬から12月上旬

### (3) 手続き

半構造化面接法で行った。聞き取り内容は、①主に個別の（教育）支援計画への取り組み方や作成・様式のことに関する「個別の（教育）支援計画の策定について」、②連携に関する「家庭との連携について」「関係機関との連携について」「地域との連携について」、③個別の配慮を要する子どもに対しての支援や保育士の姿勢に関する「保育所（園）での支援について」という5つであった。

分析方法は、ボイスレコーダーに録音した聞き取り内容を逐語録に記し、断片化してカテゴリーに分類・整理した。カテゴリー及び分類内容は、X県の保育園園長1名と協議の上、決定した。

## 3. 個別の（教育）支援計画を中心としたハンドブック作成と有用性の検証調査

ハンドブック作成までの手続きは、次の通りである。①前項聞き取り調査で分類したカテゴリーを参考にし、冊子の構成を考える。②質問紙調査と聞き取り調査の結果をそれぞれ構成内容に分け、特に回答数の多かったものを中心に、下書きを作成する。その際、保育所（園）でもらった資料や文献等も参考にする。③下書きを基に「保育所（園）における『気になる子』への支援ハンドブック」（案）を完成させる。④完成したハンドブックの案を実際の保育現場で見てもらい、修正を重ねる。

続いて、ハンドブックの有用性の検証を行った手順は次の通りである。①X県の保育園1園で見てもらい、修正・改善の意見をもらう。②ハンドブックの修正をする。③修正版を、聞き取り調査を行った20所（園）に見てもらい。④さらに修正を行う。⑤最終版を、聞

き取り調査の協力を得た保育所（園）に配布する。

## Ⅲ. 結果と考察

### 1. 質問紙調査

#### (1) 回収数と回収率

公立保育所（園）（以下、公立と称す。）は191/250所分（76.4%）、私立保育所（園）（以下、私立と称す。）は143/289所分（49.5%）の回答を回収した。私立の回収数は145所であったが、そのうち2所分が無効回答であった。質問紙全体の有効回答率は61.9%であった。

#### (2) 回答者の属性と在職年数

回答者の属性は、Table 1の通りである。

なお、複数名での記入と無記名があったため属性の合計は保育所数と一致しない。記入者の在職年数は、3年以下が174人、4～8年が78人、9～12年が15人、13年以上が34人、その他が25人で、その内訳は15年（13人）から46年までに及んでいた。

Table 1 回答者の属性について

属性	公立	私立
所（園）長	144	79
特別支援教育コーディネーター（以下、Co.）	24	11
主任保育士	10	10
副園長	8	11
保育士	6	4
その他	2	6

#### (3) カテゴリー分析

質問項目の保護者等からの聞き取りや家庭との連携に関する自由記述は「家庭との連携」、医療機関や福祉機関、保健所・保健センター、地域に関する自由記述は「関係機関との連携」、短期目標と長期目標に関する自由記述は「目標」、そして「心理検査」として、第1カテゴリーを4分類することができた。その分類ごとに「家庭との連携」をTable 2、「関係機関との連携」をTable 3、「目標」をTable 4、「心理検査」をTable 5にまとめる。なお、カッコ内は、記述数を示す。

#### (4) 考察

まず、「家庭との連携」について述べる。

「連携方法」に関しては、送迎時や個人懇談・連絡ノートなどの連携方法が共通しており回答数も多かったことから、保育所（園）と家庭との連携において、保育士は保護者との毎日の関わりや情報共有を重視していることがうかがえる。また、家庭との「連携内容」に関しては、専門機関での子どもの様子や検査結果・

Table 2 家庭との連携 (n=452)

時期 (24)	入所(園)前(16) 入所(園)後(8)
連携方法 (196)	個人面談/懇談(91) 送迎時(45) 連絡ノート(32) 家庭訪問(9) お知らせ(2) 保育参観(4) その他(相談室、行事等)(8)
連携内容 (232)	園と家庭での連携に関して(147) 専門機関との連携に関して(64) 小学校との連携に関して(14) 園内での連携に関して(7)

Table 4 目標 (n=280)

目標の決め方 (165)	・設定する期間・ペース(95) ・長期目標に向けて(8) ・基づくもの・参考にするもの(18) ・現在の子どもの姿や発達を踏まえての目標設定・支援(28) ・1ステップ上の目標(5) ・願い(9)
目標の内容 (89)	・生活面(26) ・スキル面(19) ・集団生活(25) ・情緒面(6) ・行事・活動への参加(7) ・あそび(3) ・課題点(4)
学級・園運営 (26)	・家庭・保護者との連携(9) ・所(園)の体制(5)

健診内容等の情報を聞いたり、子どもの家庭での様子について聞いたりしており、保育士が日々、保護者自身の願いや思い・困り感や悩みに寄り添っていることが分かる。ハンドブックには、このような家庭と保育所(園)との連携方法や、どのような連携が行われているかを記載することが重要である。しかし、この連携内容は、所(園)と家庭の大まかな連携内容について示されたものが多く、具体的な保護者の様子や保育士の関わり方については質問紙からは十分な情報を得ることができなかった。したがって、聞き取り調査では、具体的な内容や関わり方について重点的に聞き取りを行う必要があると考えられる。また、保護者とのかわりにおいて保育士が大切にしていることや、保護者との信頼関係の築き方についても聞き取りを行う必要があると言える。

次に、「関係機関との連携」について述べる。

「医療機関」「保健所保健センター」「福祉機関」「地域」項目のそれぞれの自由記述において、共通して、連携先の関係機関に関する記述が多く見られ、それら

Table 3 関係機関との連携 (n=757)

医療機関 (240)	医療機関(215) 医師との連携(21) 保護者との連携(4)	小学校(133) 療育センター(91) 通園施設/療育施設(82) 病院(71)
保健所保健 センター (102)	保健所保健センター(18) 健診(59) 連携(25)	発達支援センター(70) 自治体・行政(55) 連盟・連絡会・協議会(38) リハビリセンター(29)
福祉機関 (192)	福祉機関(152) その他(40)	保健所・保健センター(18) 地域(6) その他(36) 健診(59)
地域 (223)	教育機関(179) 自治体・行政(38) 地域(6)	医師との連携(21) 保護者との連携(12) 園との連携(17)

Table 5 心理検査 (n=42)

検査名 (28)	WISC/WISC-III/WISC-IV(8) 遠城寺式発達検査/改訂版(7) 新版K式発達検査2001(7) 田中ビネー知能検査(2) WPPSI(1) 乳幼児分析発達検査(1) PVT-R 絵画語彙発達検査(1) K-ABC(1)
検査の機会 (12)	専門機関受診時(5) 育児相談、発達相談、療育相談を受けたとき(3) 健診後(1) その他(3)
園での活用 (2)	園での活用(2)

の機関ごとに記述内容を分類することができるものが多かった。したがって、X県内の各地域における連携先の場所や、各関係機関にどのような機関・施設・支援者があるかということを手ブックに記載することができると考えられる。しかしながら、関係機関とのつながり方や、連携ペース、具体的な連携内容については情報が不足しているため、聞き取り調査では主に機関との関係の築き方や連携内容を中心に聞き取りを行う必要がある。

続いて、「目標」について述べる。

内容面に関しては、「生活面」「スキル面」「集団生活」「情緒面」「行事・活動への参加」の小カテゴリーが共通していた。したがって、短期的に見ても長期的に見ても、特別な配慮を要する子どもについて、保育士は主にこれらの内容が「気になる」と感じていると推察できる。また、短期目標には、長期目標の下位項目に加えて「あそび」「課題点・問題点」という小カテゴリーの項目も分類された。このことから、保育士はこの2つに関しては短期を中心に目標を設定していることが

うかがわれる。さらに、目標の決め方に関しては、「設定する期間・ペース」「基づくもの・参考にするもの」「現在の子どもの姿や発達からの目標設定・支援」の小カテゴリーが共通していた。基づくもの・参考にするものに関しては、長期的にも短期的にも、園の方針や保育所で独自に作成している保育課程を踏まえていたり、保育所保育指針や遠城寺式等の発達検査の発達の目安、専門機関からのアドバイスを参考にしたりしている。また、現在の子どもの姿や発達からの目標設定・支援に関しては、現在の子どもの姿や力を実態把握し、発達や特性に合わせて目標を設定している。これらを設定する期間に関しては、長期目標は月・期・年・卒園時／就学时・障害を見据えて、というような単位であるのに対し、短期目標は日・週・月・期・半年・年というように、長期目標よりも細かい単位で設定されていた。長期目標は、その子どもにどのように育てほしいか等、保護者や保育士の願いが前提となっている。その願いの達成に向けて、短期目標に細かく下ろし、スモールステップで支援計画を立てる。その内容が短期目標の「長期目標に向けて」や「1ステップ上の目標」である。長期目標へ向かって段階を踏めるよう、現在の状況を踏まえてその子の今の姿のほんの少し上を目標としているという記述が多く挙げられている。このように、1つの機関のみで計画を立てるのではなく、その子の実態に応じて、短期から長期まで見据えて計画が考えられていることが分かった。したがって、個別の（教育）支援計画の目標に関しては、目標を定める期間や姿勢、内容についてハンドブックに記載することができると考えられる。しかしながら、個別の（教育）支援計画策定の対象や目標を立てた後の振り返り・評価については、この質問紙で得ることはできなかったため、聞き取りでさらに情報を得る必要がある。

最後に、「心理検査」について述べる。

他に比べて回答が少なく、保育所（園）内ではあまり行われてないことが明らかとなった。心理検査に記入があった園では、「WISC」や「遠城寺式発達検査（改訂版）」、「新版K式発達検査2001」を行っている園が多かった。中でも「遠城寺式発達検査」は保育所（園）でも行いやすいという意見が見られた。また、心理検査が保育所（園）内ではあまり行われていない理由は、関係機関への受診により検査している保育所（園）が多いためであると考えられる。それは、関係機関との連携に関する記述で発達検査がよく出てくることから言える。このように、機関への受診により検査する

他、育児相談や発達相談、療育相談等を受けたときや、保護者が専門機関での発達検査を希望した場合には行われることが多いことがうかがわれる。

以上のことから、質問紙調査から見えてきたハンドブック作成に必要な内容を、聞き取り調査で深めていき、より良いハンドブックを作成することを目指す。

## 2. 保育所（園）への聞き取り調査

### (1) 回答者

聞き取りを行った調査対象者を Table 6 に示す。

Table 6 調査対象者

所/園	人数	対象	所/園	人数	対象
①	1	担任	⑪	1	園長
②	1	代表取締役	⑫	1	所長
③	2	主任保育士・担任	⑬	2	園長・特別支援教育 Co.
④	2	主任保育士・担任	⑭	1	園長
⑤	3	園長・主任保育士・特別支援教育 Co.	⑮	2	園長・主任保育士
⑥	1	園長	⑯	1	所長
⑦	1	園長	⑰	1	園長
⑧	1	園長	⑱	1	園長
⑨	1	園長	⑲	1	園長
⑩	1	園長	⑳	1	園長

### (2) カテゴリー分析

聞き取った内容を、「個別の（教育）支援計画の策定について」、「連携について」、「個別の配慮を要する子どもに対しての保育所（園）での支援について」の3観点に分類・整理した。

「個別の（教育）支援計画の策定について」では、161の記述が見いだされ、「気になる子（88）」、「対象（19）」、「形式（10）」、「きっかけ（9）」、「評価方法（35）」に分類された（カッコ内は聞き取り数を示す）。

「気になる子」の気になる内容については、集団関係の難しさ、コミュニケーションの難しさ、発達の遅れ、こだわり、整理の困難、刺激、攻撃性、多動、家庭環境の問題等があり、「対象」の例としては、加配がついている子、相談を受けている子、手帳を持っている子、診断が下りている子等が挙げられた。「形式」は、市で統一されているもの、機関が推奨しているもの、園独自のものが挙げられた。「きっかけ」の理由としては、「相談した際に形式を勧められ始めた」、「近くに療育施設があり、専門的な知識で教室なども行っているため勉強を兼ねて連携をしたのがきっかけである」、「障害のある子を保育するために、子どもの姿を

きちんと見極めねらいをもって保育をすることが必要であるため、「子どもとかかわる中で、目標を立てた方が分かりやすく、見通しを持ってかかわることができるから」、「診断が出ていなくても、計画を立てた方が子どもにとって良いと考えたから」ということが述べられていた。「評価方法」の具体では、ケース会議に関して「毎月1回ケース会議を行っている」、「ケース会議をすることで、全員で意識統一をしている」、「用紙に各クラスの気になる子どもの状況を書き、話し合う」ということが挙げられた。

2点目の「連携について」は、「家庭(126)」、「関係機関(114)」、「地域(48)」に分類された。

家庭との連携の中で、最も重視していることは、関わり方であった。具体的には、日々の話では「日々の様子を5分でも話すことが信頼関係につながる」、「日々コミュニケーションをとり、担任と保護者が通じ合ってくる仲になると受け入れられやすい」ということがあった。また、信頼関係を築くために、「絶対に嘘はつかない」、「子どもにけがをさせない」、「細かいところまで行き届いた保育をする」、「子どもが出したエピソードやつぶやきをお母さんに伝える」などが実践されていた。

さらに、伝え方では、「ストレートに伝えない」、「その子の良いところや伸びたところを伝える」、「家でのことを先に聞く」、「少しずつ段階を踏んでいく」などが挙げられた。

保育士の姿勢としては、「保護者がシャットダウンしたときは無理には勧めず、園でできる限りのことをする」、「器質的なものからつなげる(発達障害や知的障害に関して抵抗がありそうな場合、耳鼻科や眼科などが総合的に入っている大学病院や県立病院からつなげてみる)」、「巡回相談を利用する」などが指摘された。

関係機関との連携の際に、基本姿勢として、「保護者の了承を得て一緒にについていく」、「機関と保護者のつなぎ役になる」と、保護者が関係機関と連携するのをバックアップするということが分かった。

地域との連携の具体としては、「高齢者のデイサービスに年長児が行き、歌を歌ったり触れ合ったりする」、「地域の人と一緒に散歩に行ったり、野菜作りの時に来てもらったり、収穫祭等の行事の際に招待するなど、地域の人と様々な交流を行う機会を設けている」、「高校生のチャレンジボランティアや、中学校からの職場体験などの、学生との交流の機会がある」等が挙げられた。

3点目の「個別の配慮を要する子どもに対しての保育所(園)での支援について」は、「声掛け(17)」、「席の配置(7)」、「落ち着ける空間やもの(9)」、「視覚化(18)」、「環境設定(6)」、「保育士が大切にしていること(17)」、「園独自の取り組み(7)」、「情報共有(8)」、「その他(7)」の9カテゴリーに分けられた。

「声掛け」としては、具体的に「アバウトな声掛けではなく、『これが終わったらこれをします』というような具体的な見通しがもてるように1つ1つ伝えるようにする」、「製作などをする際、全体に声をかけた後、個別に一言多く言葉をかける」、「細やかに声をかける」、「禁止をしないように、肯定的・具体的で短い言葉に言い換える」、「誉め言葉には名詞をたくさん入れるように心がける」、「伝え方は子どもによってさまざまなので、担任がその子の特性をつかみ、みんなで統一する」というようなことが挙げられた。

「席の配置」としては、「刺激やおもちゃが少ない前の席に座らせる」、「加配の先生が見える範囲に座らせる」、「椅子をいつも同じ位置においたり、シールを貼って一人ずつの位置をきちんと決めておいてそこに座る形をとったりする」等が挙げられた。

「落ち着ける空間やもの」では、「机の向きを変えたり、パーティションで区切ったりするなど、気持ちが落ち着けるようなスペースを作る」、「パニックになった際には、一番その子にとって信頼のおける人がいると落ち着く」、「『個別の保育』として、気になる子ども何人かが週に1回ホッとできる時間を作っている」、「刺激を入れることが必要な子どもに関しては、椅子の下のとこに人工芝をかませておく」、「感覚グッズを持っていると落ち着くお子さんもいる」、「行き当たりばったりで子どもに不安を与えないように、極力訂正が入らないように前もって所(園)できちんと準備をしておく」ということ等が挙げられた。

「視覚化」では、「日課表」や「手順表」といったスケジュール表の活用が多く挙げられた。これは、年少は絵、年中からは文字等、年齢やその子の発達段階に応じて工夫されていたが、その子だけでなく、クラス全体が見通しを持って過ごせるように各所(園)で工夫していることが明らかとなった。その他にも、「時計におしまいのマークをつけたり、声の大きさを絵で示したりする」、「視覚的な支援カードを使用する」、「相手の気持ちをその都度絵で示している」、「前もってその日の行程を絵や写真などで予告しておく」といったことが挙げられた。

「環境設定」としては、「一人一人の特性をしっかり

理解し、子どもに合わせて遊びを仕組む。集団から外れがちなので、その子の好きな遊びを集団のものにしてみんなで楽しめるように遊ぶ」、「子どもが自らできるような環境づくりをする」、「大きい子の中で育つことはとても刺激になるので、異年齢保育にする」等が挙げられた。

「保育士が大切にしていること」としては、「今手を出すべきなのか出さないのかということを常に考え、子どもを信頼して待つことを大切にする（すべてに手を出したらその子の成長が止まったり、その子がやろうとする気持ちを止めてしまったりすることにつながるため）」、「発達障害があらうとなかろうと、子どもに関わることは皆同じである。こうなってほしいという大きなねらいがあり、それが身についたかを振り返る機会が常にある」、「その子を受け入れるということが一番の根本である」、「計画通りにやろうと当てはめて安心していないか振り返る」といった姿勢が指摘された。

「園独自の取り組み」としては、「色々なことにチャレンジさせる」、「普段の生活の中に歌とリズムがあふれるようにする」、「百人一首やかるた・詩などを暗唱する」、「歩行が確立した子から描画を開始する」、「子どもの発達を促すために、毎日サーキットを行う」などが挙げられた。

「情報共有」としては、「月2回各クラスの代表が集まりお昼の時間に会議をする」、「職員会議の中で気になる子の話し合いをして全員が共通理解する」、「時差勤務で忙しいので、職員室に来た時にその都度情報交換を行う」、「ホワイトボードなどを利用して園長からみんなに周知する」などが挙げられた。

「その他」としては、「みんなと同じように整理整頓することが難しいため、その子用に特別なかごを用意する」、「入園してからずっと使うその子用のマーク（動物等のイラスト）を全園児につくる」、「実際の保育をビデオに撮って観察する」、「10分でも良いので、毎日その子を観察する」等が挙げられた。

### 3. 個別の（教育）支援計画を中心としたハンドブック作成と有用性の検証調査

#### (1) ハンドブックの作成

質問紙調査と聞き取り調査で分類された内容を基に、A4判36ページのハンドブックを作成した（Table 7, Fig.1）。

#### (2) ハンドブックの有用性の検証

評価シートのフェイスシートの項目としては、職種

として所（園）長、副所（園）長、主任保育士、担任（乳児・幼児）、その他の判別を行った。質問項目としては、加藤（2014）のコンサルタント評価フォームを参考に6件法で行った結果、各保育所（園）20所（園）中13所（園）から回答があり、回収率は65%であった。保育所（園）における役職別の回答者数は所（園）長7名（54%）、主任保育士5名（38%）、担任（幼児）1名（8%）の3つの役職であった。

Table 7 ハンドブックの構成

- ・はじめに
- ・もくじ
  1. 「気になる子」とは…？
  2. 個別の（教育）支援計画とは…？
  3. 個別の（教育）支援計画Q&A
  4. 保育所（園）での連携
    - ①家庭との連携
    - ②専門機関との連携
    - ③地域との連携
  5. 支援計画サンプル集
  6. 保育所（園）内での支援
  7. 課題
- ・おわりに



Fig.1 ハンドブック（一部抜粋）

#### 1) 全体の評定平均値

各項目の評定平均値は Fig.2の通りである。全ての項目において評定平均値が4.0以上であり、全体の平均値は4.9の「そう思う」であるため、ハンドブックに対する肯定的な評価がうかがえる。項目別に見ると、「支援する上で参考になる」「役立つ情報」「策定する上で参考になる」「似た考え方」「活用しやすい」の評定平均値が4.5以上の「そう思う」である。その中でも、「支援する上で参考になる」「役立つ情報」の項目の評定平均値は5.0を超えており、保育士が「気になる子」を支援する上でこのハンドブックの情報が役に立つと

特に感じたことが明らかとなった。一方、「有効な支援法」では、評定平均値が4.4の「少そう思う」であり、他の項目と比較して評価が低い。これは、聞き取りの際に「結局はその子一人一人の個性に応じて何が出来るかを考えていく事が大切である」と述べた保育士が多く、「全ての子どもにとって有効な支援法というものには存在しない」という保育士の考え方が表れている結果であると考えられる。

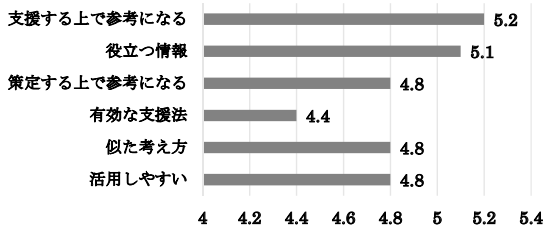


Fig.2 評定平均値 (全体)

### 2) 役職別の評定平均値

役職別の評定平均値はFig.3の通りである。役職別に見ると、所(園)長は4.9、主任保育士は4.8、担任(幼児)は4.7であり、全ての役職が「少そう思う」であった。また、項目別に見ると、「支援する上で参考になる」「役立つ情報」「似た考え方」の項目で所(園)長の評価が最も高かった。全体的に所(園)長の評価が一番高かったのは、聞き取り調査の際の対象に所(園)長が最も多く、ハンドブックに各所(園)長の意見・考えが一番多く組み込まれているためであると考えられる。

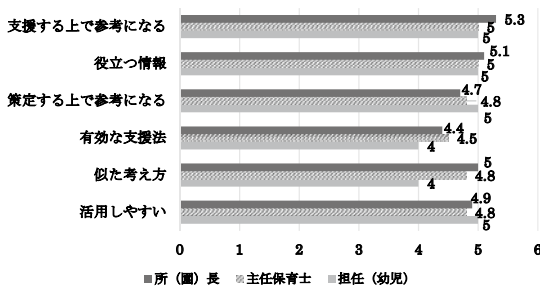


Fig.3 評定平均値 (役職別)

### 3) 有用性を示す記述内容

評価シートの自由記述欄の記述内容を「肯定的な記述」と「改善・修正に関する記述」に分類した。さらに「肯定的な記述」は「表現」と「内容」、「改善・修

正に関する記述」は「全体的な改善点」と「具体的な改善点」に分類することができた。「表現」はハンドブックの表記に関連した記述内容、「内容」は具体的なハンドブックの内容に関する記述内容を示す。また、「全体的な改善点」はハンドブックの改善点を示したもののうち、ハンドブック全体に関する記述内容、「具体的な改善点」はハンドブックの改善点を示したもののうち、ハンドブック本体のページ数を指定して指摘している記述内容を示す (Fig.4)。

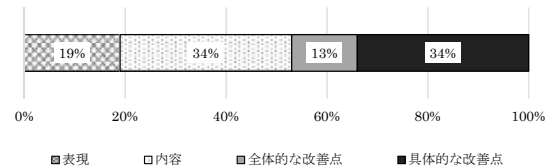


Fig.4 記述内容の内訳

ハンドブックの表現については、手書きやイラストが分かりやすいと述べられており、肯定的な評価を得ることができた。このハンドブックを手書きにした理由が、読む人に親しんでもらいやすくするためであったので、この点に関しては作成にあたって工夫したことの一つが成果となって表われたと言える。

しかし、文字の大きさが小さかったため読みにくく、また、文字の太さや色が同じであるため、どこが一番重要なかが分かりにくいという指摘もあった。ハンドブックの修正にあたっては、大事なところが瞬時に目に入りやすいよう、文字の表記や大きさにもっと差をつけるようにする必要があると考えられる。

ハンドブックの内容については、主に「具体的に理解しやすい・参考になる」という記述が45%、「よくまとまっている」という記述が27%、「若い保育士や学生には参考になる」という内容が18%であった。

一方、改善点としては、実際の保育所内での支援は子ども一人一人によって違うため、もっと多くの情報が必要であるという指摘や、最終的には子どもの様子をじっくり観察し、その子の困り具合や分かり具合に合った支援法を生み出していかなければならないという指摘が挙げられた。ハンドブックを修正するに当たっては、ある程度現場の保育士の話から得られた共通事項を記載していく事も必要ではあるが、子ども一人一人に寄り添った支援や、保育士としての意識の部分については今後も考え続けていく必要がある。

具体的なハンドブックのページにおける修正・改善点については、保育所(園)やそれぞれの先生によ

て考え方や意見が違うので、同じ内容についても意見が正反対のこともあり、全員にとって良いと思ってももらえるようなハンドブックを作成することは難しい面もある。しかしながら、現場の保育士の多くが、「障害のある子もない子も、みんな個性や個人差がある。一人一人の個性を捉えて受け止め、どのように働きかけるといいか、常に考え行動することが大切」という姿勢を持っていることが明らかになった。

#### IV. 総合考察

本研究の結果より、各所（園）では、様々な連携・支援が行われているにも関わらず、「個別の（教育）支援計画」としては十分に機能していないという現状が示唆された。このことは、原野・朴・佐藤・鶴巻（2009）、河野（2010）、中島（2011）の研究とも一致している。その原因としては、石橋（2009）も述べている個別の（教育）支援計画への認識の問題や、20所（園）全てから示された保護者の同意の問題が挙げられるのではないかと考えられる。そして数所（園）から「保育所（園）で作成する書式はこの他にもたくさんあるので負担が大きい」との意見もあった。個別の（教育）支援計画は、策定すること自体が重要なのではなく、子どもの自立や社会参加につなげるためのツールとして機能することが大切であると上岡（2008）も述べている。今後、保育所（園）でのさらに有効な活用と推進が図られるようにするため、保育現場での個別の（教育）支援計画の意義や活用方法の整理、情報の共有等が必要であると考えられる。本研究で作成したハンドブックはその一環として位置づけることができる。

本ハンドブックは、評価シートの評定平均値や自由記述内容から、保育士が肯定的に評価していることがうかがわれた。特に「支援する上で参考になる」「役に立つ」と考える保育士が多く、ハンドブックの存在自体は有効であると考えられる。しかし、「有効な支援法」に関しては他の項目に比べて評価が低かったため、今後はさらに情報量や内容を吟味して改良を重ね

ていく必要があると考えられる。

#### 文献

- 郷間英世・圓尾奈津美・宮地知美（2008）幼稚園・保育園における「気になる子」に対する保育上の困難さについての研究. 京都教育大学紀要, 113, 81-89.
- 原口英之・野呂文行・神山努（2013）保育所における特別な配慮を要する子どもに対する支援の実態と課題—障害の診断の有無による支援の比較—. 障害科学研究所, 37, 103-114.
- 原野明子・朴春花・佐藤拓・鶴巻正子（2009）福島県内の幼稚園における個別の指導計画作成の現状. 福島大学総合教育研究センター紀要, 7, 93-101.
- 石橋亜沙美（2009）保育所保育における「個別の計画」導入に関する社会的背景と課題. 中村学園大学・中村学園短期大学部研究紀要, 41, 7-15.
- 加瀬進（2014）近年の「個別の支援計画」をめぐる実践・研究・政策の動向と課題. 東京学芸大学紀要総合教育科学系, 65(2), 157-164.
- 河野順子（2010）幼稚園・保育園に在籍する特別な支援を必要とする子どもたちの現状と支援に関する調査研究—個別教育支援計画実施の観点から—. 東海学園大学研究紀要, 15, 83-97.
- 厚生労働省（2008a）保育所保育指針解説書. フレーベル館.
- 厚生労働省（2008b）障害児支援の見直しに関する検討会報告書.  
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/07/dl/s0722-5a.pdf>（2017年11月19日閲覧）.
- 中島正夫（2011）保育所（園）に通う障害を持つ子どもに関する「個別の支援計画」策定状況などについて. 椋山女学園大学研究論集自然科学篇, 42, 13-25.
- 上岡一世（2008）個別の教育・指導・移行計画の作成とその実際—一貫的・継続的教育の実現—. 明治図書.  
(2018. 1. 12受理)



## A Study on Provision of Support for Children that Require Special Attention in Nursery Schools: An Attempt to Prepare a Manual Covering Individual Education Support Plan

Akihiko WAKAMATSU

Department of Special Needs Education, Graduate School of Education, Hiroshima University

Yasuko TAsAKA

Kitakyushu Municipal Moji Sogo Special Needs School

Support for children who require special attention has been an issue in nursery schools (Haraguchi, Noro, & Kamiyama, 2013). Studies have also pointed out that there are currently less plans for individual (education) support than for individual instruction. Thus, the study conducted questionnaire and interview surveys on individual (education) support plans in nursery schools, and aimed to grasp the situations and characteristics in actual nursery schools, create a manual for solving issues in nursery schools, and consider the effectiveness of the manual. There were some opinions that gave positive evaluation about the manual that mainly featured individual (education) support plan, and that they were specific, useful, and informative for younger nursery school teachers and students. On the other hand, there were also opinions that pointed out that there was a need to create supporting methods appropriate for each of the children. Interview survey and the preparation of the manual revealed that the nursery school teachers were constantly aware of dealing with each one of the diverse children.

**Keywords:** nursery schools, individual support plan, manual